

『日本医療薬学会 JSPHCS/BMCK 海外研修』報告書

福岡大学病院
緒方 憲太郎

今回『平成 19 年度 JSPHCS/BMCK 海外研修』に参加させていただき、第 43 回米国臨床腫瘍学会 (ASCO Annual Meeting) への参加 (6/1~4)、M.D Anderson Cancer Center での研修 (6~8) を受ける機会に恵まれ、以下にその抜粋を報告する。今年の ASCO Annual Meeting は『Translating Research Into Practice』をテーマに開催され、新たながん医療における様々な evidence が発表されるとあって連日大盛況であった。肺癌の session では日本から「Result of randomized Phase III study to compare the overall survival of gefitinib (IRESSA) versus docetaxel in Japanese patients with non-small-cell lung cancer who failed one or two chemotherapy regimens」の結果が発表された。現在、進行非小細胞肺癌の標準的な 2nd line chemotherapy regimen は docetaxel による治療であるが、日本においては gefitinib による治療も優れた成績が既に報告されており、本報告では gefitinib の docetaxel に対する非劣性試験の結果が報告された。しかし primary endpoint である overall survival の他、1 年生存率に関してもその非劣性は証明されなかった。一方、消化器癌の session では同じく日本から「Randomized phase III study of S-1 alone versus S-1 + cisplatin in the treatment for advanced gastric cancer (The SPIRITS trial)」が報告された。本試験は切除不能または進行胃癌を対象にした S-1 単剤と S-1/CDDP regimen の比較である。結果は、その primary endpoint である overall survival において median survival time は S-1 単剤群 11.0 ヶ月に対して併用群は 13.0 ヶ月、1 年生存率もそれぞれ 46.7%、54.1% と有意に併用群が優れていた。しかし Discussant より S-1 の effector となる tegafur を 5-FU に変換する CYP2A6 の SNP が人種間によって認められることや、現在海外で行なわれている 5-FU/CDDP vs S-1/CDDP 試験の結果を考慮していくことなどを理由に現時点において世界の標準治療とはならなかった。個人的に ASCO という大きな学会において positive/negative を問わず、oral session で日本からのデータが報告されることを誇りに思った。この他、全般的に分子標的薬剤台頭の時代到来という雰囲気幅広い会場内に溢れていた。

M.D Anderson Cancer Center では Clinical Exchange Program 研修を受けた。M.D Anderson Cancer Center はまずテキサス、そしてアメリカひいては世界からがんを無くすことを mission とし、その vision として臨床、研究、教育を柱に世界一のがんセンターとしてがんの歴史を作っていることを挙げている。M.D Anderson Cancer Center における患者ケアの基本は Physician, Fellow, Mid-Level Practitioner, Pharmacist, 他から構成される Multidisciplinary team による Multidisciplinary approach であり、この研修において一番感じたことは、必要とされているスタッフのレベルの高さである。とりわけ薬剤師の場合、講義を担当していただいた薬剤師は Pharm. D.、Board Certified Oncology Pharmacist であることからわかるように、世界で 1, 2 を争う病院の中で Clinical Pharmacy Specialist として役割をこなすための薬剤師としての高い資質がうかがえる。実際に薬剤師に一部処方権があることや必要と考えられる検査オーダーがたてられることなどがその例である。その一方で、それ以外は我々が普段チーム医療で行っていることとそれほど変わらないという印象が強く、薬剤師としての役割の再確認ができたとともに、今後向かうべく方向付けが自分の中でできたのではないかと感じた。圧倒的なマンパワーの差やオートメーション化には太刀打ちできないと思ったが、外来診療を見学させていただいたときの、医師が患者により知らせをした際に患者と一緒に喜ぶ姿に、医師のみならず医療者としての基本はここにあるということを強く感じた。ASCO において感じた進みゆくがん治療の実際と、その背景に高い水準でサポートされる臨床試験の展開があること、その中で薬剤師に求められることとできること、M.D Anderson Cancer Center で知った薬剤師の資質向上の必要性と医療人としての姿勢など我々が見てきたものを、現場と日

本の薬学 6 年制教育の中に少しでも還元できればと思う。

最後に、今回このような貴重な機会と手厚いサポートをいただいた日本医療薬学会をはじめ関係者の方々、九州大学病院 大石了三先生、大変お世話になった今回の派遣者 橋田亨先生、宮田広樹先生、岩下佳敬先生、M.D.Anderson Cancer Center のスタッフの方々と患者様に感謝致します。